



Title	日本語における「無」ではじまる二字漢語の特殊な意味の形成についての研究 : CONTAINER イメージ・スキーマに基づいて
Author(s)	チャン, クオック ヒエップ
Citation	日本語・日本文化研究. 2024, 34, p. 54-68
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/101315
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語における「無」ではじまる二字漢語の特殊な意味の形成についての研究 —CONTAINER イメージ・スキーマに基づいて—

チャン クォック ヒエップ

1. はじめに

特殊な意味とは、語の意味がそれぞれの要素の意味の総和にならないことであり、その意味は2つの要素の意味が融合して単一の意味になることを指す。影山（1993）によると、派生語が接辞と語基の本来の意味から意味を推測できる場合、その意味は透明である一方で、派生語が接辞と語基の本来の意味を足しても造語全体の意味にならない場合、その意味は特殊化している（影山 1993：8）。本研究の対象となる「無」ではじまる二字漢語には、接頭辞としての機能から逸脱し、特殊な意味を持つ語が少なくない（チャン 2022、2023a、2023b）。以下の（1）は特殊な意味がある「無」ではじまる二字漢語とその例を示す。

- （1） a. 多勢に無勢だ。（勢力がない→人が少ない）
b. 言葉の意味は無数にある。（??数がない→数が多い）
c. 何物にも替えがたい無価の家宝。（??価値がない→価値が高い、貴重だ）
d. 時間を無駄にする。（??ダメが無い→非常に駄目だ）

具体的には、「無」ではじまる二字漢語には、（1a）での「少ない」、（1b）での「多い」という量的価値を表すものがあり、（1c）での「良い」、（1d）での「良くない」という質的価値を表すものも存在する。さらに、（1d）では「無」が「甚だしい」という程度評価を表すことで、後ろの語基の悪さを強調する。このように、「無」ではじまる二字漢語は必ずしも「存在性の否定」という典型的な意味だけを表すわけではなく、特殊な意味があることが明らかになっている。

本研究で扱われる「無」ではじまる二字漢語の特殊な意味は、意味が特殊化した結果であり、語義が「無」と結合相手の総和、すなわち「ない、存在しない」にとどまらず、意味が融合し、新たな意味を派生するものである。しかし、その特殊な意味の形成についてはまだ解明されていない。本稿は、チャン（2022、2023a、2023b）の研究に続き、「無」ではじまる二字漢語の特殊な意味について、その形成過程を説明することを目的とする。そして、「無」ではじまる二字漢語の量的価値と質的価値、その多様性を明らかにする。

2. 先行研究とその課題

王（2006）は影山（1993）に倣って、特殊化が進むと、接辞と語基の本来の意味から造語全体の意味を推測できなくなり、「構成性の原理」を満たさなくなると指摘している。王

(2006) は (2) の語において「無」の造語による特殊化があると指摘した。

- (2) a. 無記名、無生物
 b. 無口、無心、無邪気
 c. 無闇

(王 2006 : 135)

王 (2006) によると、「無記名」は「記名ではない、投票の方法の一種」、「無生物」は「生命をもたないもの」、「無口」は「口がない」の意味だけではなく、「口数が少ない」といった意味が特殊化している。「無闇」はさらに意味の特殊化が進んでおり、全体として「いい加減に、過度に」という意味を示している。だが、王 (2006) は少数の実例を「無」の典型的な意味から離れた例外として取り上げたにとどまり、「無」ではじまる語の全体から、「無」ではじまる語の特殊な意味を体系的に分析しなかった。

チャン (2023a) は、日本語の「無」ではじまる 305 二字漢語を分析対象とした。これらの分析ではまず、「無」と結合する語基の意味内容と評価の語義全体への影響を考慮し、量の多寡と評価の良し悪しを表すかどうかという点に着目した。その結果、「無」ではじまる二字漢語は「ない」、いわゆる「存在性の否定」から、量的価値「多い」「少ない」、質的価値「良い」「良くない」、程度評価「甚だしい」といった 5 つの特殊な意味に発展していることが明らかとなった。さらに、特殊な意味の体系を明確にするため、「無」ではじまる二字漢語を[Non-Existent]、[Boundless]、[Negative]の 3 つの素性で分類した。その結果は表 1 のようにまとめることができる。

表 1 「無」ではじまる二字漢語の分類に基づく特殊な意味

Group	代表	語数	[Non-Existent]	[Boundless]	[Negative]	量的価値	質的価値
A1	無糖	101	[+]	[-]	[-]	∅	∅
A2	無職	58	[+]	[-]	[+]	∅	良くない
B1	無限	25	[-]	[+]	[-]	多い	甚だしい
B2	無双	6	[-]	[+]	[-]	少ない	良い
C1	無礼	71	[-]	[-]	[+]	少ない	良くない
C2	無難	39	[-]	[-]	[-]	少ない	悪くない

(チャン 2023a : 214 に基づき、加筆修正)

チャン (2022, 2023a, 2023b) の分析によると、「無」ではじまる二字漢語の特殊な意味は「量的価値」と「質的価値」に分けられるが、表 1 で示したように、グループによって特殊な意味ペアに分類できることがわかる。

「無」ではじまる二字漢語の特殊な意味とその体系を明確にするためには、A、B、Cの各グループにおける特殊な意味のペアが異なる理由とその形成メカニズムについて、より詳細な説明が求められる。さらに『無』ではじまる二字漢語の意味の特殊化については、影山(1999:22)が述べたように、形式意味論よりも認知言語学のアプローチで説明されることも求められる。有光(2013)は、「無」と「空」を容器性のイメージ・スキーマの「満・空」関係で考察し、これらの概念が「有」に関連していると指摘した。チャン(2023a)は、CONTAINER イメージ・スキーマが表1のグループCの意味と強く関連しており、心的な概念を示す「無」ではじまる二字漢語は「全くない」ではなく「足りない」を示すことをFULL・EMPTYスキーマで説明した。このように、先行研究は「無」ではじまる二字漢語の意味がCONTAINER イメージ・スキーマで説明できることを示唆した。「無」が何もない状態を示すため、その「ない」状態が特定の空間における「内に何もない」というコンセプトと結びつく(Langacker 1991:134、有光 2013:164)。CONTAINER イメージ・スキーマは、認知に物事を内部と外部に分け、存在と非存在の対比に基づいて「無」=「何もない」を理解するための基本的な枠組みとなる。このように、CONTAINER イメージ・スキーマは「無」ではじまる二字漢語の語義、特に特殊な意味の理解に対して重要な理論であると考えられる。次の3節は、CONTAINER イメージスキーマを詳細に述べる。

3. 理論と考察

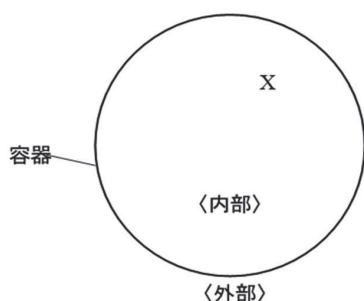


図1 CONTAINER イメージ・スキーマ
(Johnson 1987:23)

3.1 Johnson (1987) の基本的理論

Johnson (1987) によると、CONTAINER イメージ・スキーマは、CONTAINER (容器)、CONTENT (内容)、および BOUND (境界線) から構成される。CONTAINER (容器) は BOUND によって形成され、OUTSIDE (外部) と INSIDE (内部) を切り分ける。CONTENT は CONTAINER の内部に存在するが、BOUND を超えない。ここで、容器にある内容がトラジェクター (Trajector = TR) であり、それを取り囲

む枠がランドマーク (Landmark = LM) であると説明されている。図1は、CONTAINER イメージ・スキーマの基本的な構成を示している。Raykowski (2018) は、Johnson (1987) の指摘を引き継ぎ、CONTAINER (容器)、CONTENT (内容)、および BOUND (境界線) の多様性を見直した。まず、BOUND (境界線) の「封じ込み」性質について述べる。Johnson (1987) によると、境界線は内部の内容を囲むため、「封じ込み」の状態にあるとされるが、Raykowski (2018) によれば、内容が容器に入出入りするためには、容器の一部を取り外す必要がある(図2b 参照)。つまり、容器は常に「封じ込み」状態にあるわけではない。次に、CONTENT の

多様性について説明する。Raykowski (2018) によると、内部にあるオブジェクトはさまざまな可能性を提示している。例えば、内容は唯一のものだけでなく、複数の固体が集まって容器内に収容されることもある。また、内容は常に固体ではなく、気体 (図 2c) や液体 (図 2d) などでもある。このように、内部に収容されているものは有形の対象に限らず、無形の対象でもあり得る。このようなオープンな容器と無形の対象の概念は、本研究で取り上げられた「無」ではじまる二字漢語について、実的概念だけでなく、その心的世界の諸概念における特殊な意味形成のプロセスを説明する際にも有効である。

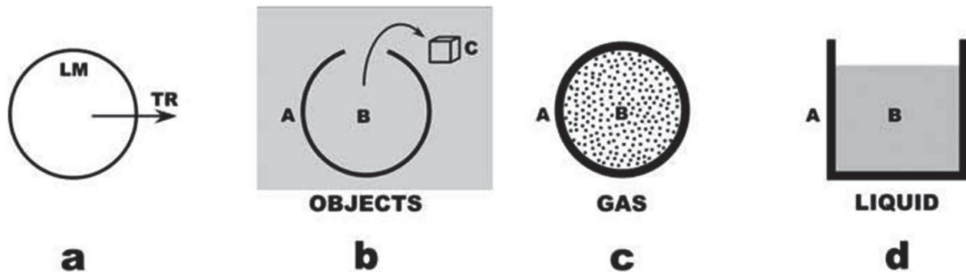


図2 CONTAINER イメージ・スキーマの多様性

(Raykowski 2018 : 109)

3.2 CONTAINER イメージ・スキーマの下位イメージ・スキーマ

Johnson (1987) では、IN・OUT、SURFACE、CONTENT、FULL・EMPTY、CONTAINMENT が「CONTAINER」という見出しの下にグループ化されている。言い換えると、CONTAINER イメージ・スキーマはより下位のスキーマを包括することができる。本研究は、IN・OUT、CENTER・PERIPHERY、FULL・EMPTY に注目する。

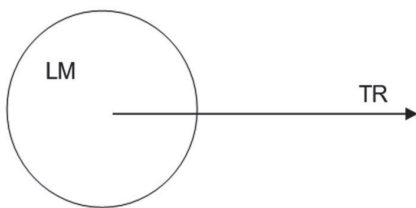


図3 IN・OUT スキーマ

(Johnson 1987 : 32)

まず、図3で示されるIN・OUTのスキーマについて述べる。IN・OUTスキーマにおける経験パターンでは、CONTAINERスキーマの「囲い込み」と「分離」が重要な役割を果たす (Johnson 1987 : 30)。「囲い込み」は部分的または全体的に行われ、特に容器内のものは完全に囲まれることがある。一方、「分離」は、ものが容器に定められた範囲から離れることを指す。つまり、容

器がものの動きを完全に制約するわけではない。この「分離」は、図3に示されるように、もの (TR) が実線の境界を持つ円 (LM) から円の外側を指す矢印で表されている。

次に、CENTER・PERIPHERY（中心・周辺）のスキーマについて述べる。Johnson（1987）は、CENTER・PERIPHERY スキーマと CONTAINER スキーマが密接に関連していると指摘している（Johnson 1987 : 124）。CENTER（中心）は内側（INNER）であり、外側（OUTER）と対比される。INNER・OUTER のパターンは、SUBJECT（主体）と OBJECT（客体）の関係を支持し、内側の次元は自己（MINE）と他者（THINE）の区別を生じさせる。CENTER・PERIPHERY スキーマは、物事の配置や関係性を理解するための認知的枠組みである。図4で示されるように、中心は重要な要素や焦点を示し、周辺はその補助的な要素や関連性を持つ部分である。この区別により、情報や状況の重要度を理解しやすくなる。中心に位置するものは、しばしば最も注目されるべき対象であり、周辺に位置するものはその補完的な情報や背景を提供する。中心にある情報は、認知的に処理されやすく、記憶にも残りやすい傾向がある。一方、周辺の情報は補足的な役割を果たすが、中心に比べて注意を引く力は弱い。この観点を引き継ぎ、有光（2011）は、図5で存在の有無の対比が量や程度、否定的価値の動機付けになっており、空間認知に基づく非明示的な否定性が「中心＝肯定」「周辺＝否定」と解釈されると説明している。

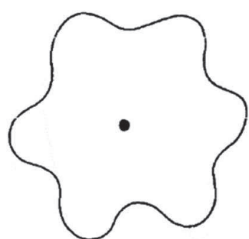


図4 CENTER・PERIPHERY スキーマ

（Johnson 1987 : 124）

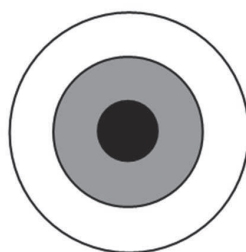


図5 遠近・中心・周辺

（有光 2011 : 29）

最後に、FULL-EMPTY のスキーマについて述べる。FULL-EMPTY スキーマは、液体のような内容に対して特殊化されたスキーマである。このスキーマは、物事の充実度や存在状態を理解するための認知的枠組みであり、特に物体や空間における FULL（満ちている）状態と EMPTY（空いている）状態の対比を強調するものである。CONTAINER イメージ・スキーマにおいては、FULL と EMPTY は相互に変化し合う関係にあり、この変化は Langacker（2008）の移動性と概念化において述べられている。図6では、すべての容器に体積の半分を占める水が入ったグラスが描かれており、それぞれの容器で言語的なエンコードが別々の解釈を導くことが説明されている。構造1はグラスの容器を強調し、構造2は中の水を強調する。一方、構造3はグラスの半分が水で占められている状態を示し、構造4は半分が空である状態を示す。構造3と構造4はどちらも主観的な視点からの解釈であるが、HALF FULL を示す構造3はポジティブな見方（矢印が上向き↑）を示し、HALF EMPTY を示す構造4はネガティブな見方（矢印が下向き↓）を表す。このように、Langacker（2008）によれ

ば、CONTAINER における FULL・EMPTY スキーマでは同じ状況を示す場合であっても、視点や焦点の置き方によって異なる言語表現が可能である。

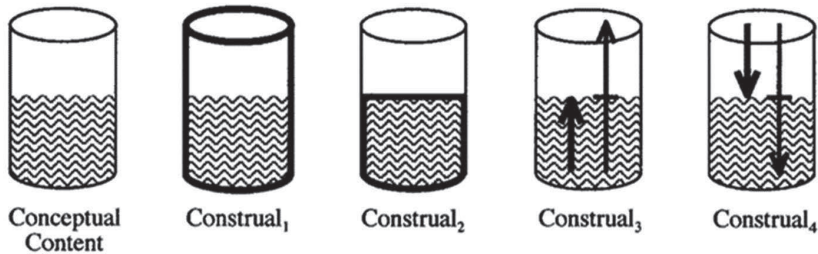


図 6 FULL-EMPTY の認知構造

(Langacker 2008 : 44)

4. 分析

本研究は、日本語の「無」ではじまる二字漢語の特殊な意味に対して、第 2 節で示唆したように、A で見られる「存在」と「不在」、B で見られる「拡大」と「縮小」、C で見られる「足りる」と「足りない」という対比が、第 3 節で述べた CONTAINER イメージ・スキーマの IN・OUT スキーマ、CENTER・PERIPHERY スキーマ、FULL・EMPTY スキーマによって解説できることを示す。そして、それぞれのスキーマを用いて、4.1 節で A の特殊な意味、4.2 節で B の特殊な意味、4.3 節で C の特殊な意味を形成するメカニズムを説明する。

4.1 A グループと IN・OUT スキーマ

A グループは、「存在するもの」(オブジェクト的な内容)が認知面(容器)から取り除かれる点において、Johnson (1987) で指摘された IN・OUT のスキーマを忠実に反映していると考えられる。そのため、A グループでは図 7 のように示され、「不在」を表すため、量的価値が存在しない。強いて言えば、その量的価値は「無」の原義、つまり「0」に相当する。



図 7 A のイメージ・スキーマ

一方で、A には質的価値が存在する。本研究は A をグループ A1 と A2 に分けている。A1 (図 7 参照) には特定の意味合いを持たないものが多い一方で、A2 にはマイナス的な意味合いを持つものが多い。これは、「存在」が望ましいとされるのに対し、「欠如」が良くないと評価されているためであろう。ただし、A の語基が表している内容の不在が必ずしも人間にとって良くないわけではなく、「良い」と見なされる場合もある。現代日本語においてこのようなプラス的な意味合いを持つ語が存在することを認め、A1 グループから暫定的に A3

（良い評価）を新たに設定している。

- (3) a. A1：無形、無音、無声、無機、無蓋、無塩、無人、無色、無畜、無線など
- b. A2：無職、無給、無根、無実、無位、無宿、無配、無品、無医、無官など
- c. A3：無料、無償、無税、無鉛、無煙、無罪、無病、無痛、無害、無臭など

A2 と A3 の相違点を図 8 と図 9 で説明する。A2 は、内容（TR）が良い（+）と見なされるため、認知面（LM）の範囲から出ると「欠如」の意を表し、明らかに「良くない」と評価される。一方、A3 は A2 とは反対に、内容（TR）がそもそも良くない、悪い（-）ため、認知面（LM）から除外されると、同じく「欠如」の意を示すが、その「欠如」が「良い」と評価される可能性がある。

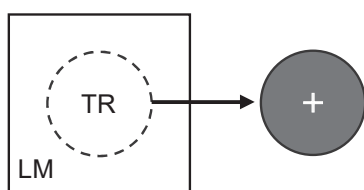


図 8 A2 のイメージ・スキーマ

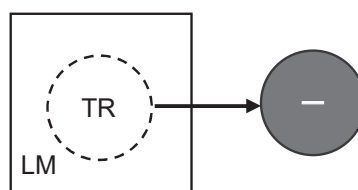


図 9 A3 のイメージ・スキーマ

A2 の例として「無職」が挙げられる。一般的には、仕事があることが望ましいとされるため、仕事がないとマイナス的な評価を受けがちである。一方、A3 の例として「無鉛」がある。「無鉛ガソリン」という用語は、「鉛」が有害であることを前提にしている。かつて、ガソリンに含まれる微量のアルキル鉛はエンジン性能を向上させ、ノッキングを防ぐために「有鉛ガソリン」と呼ばれていた。この鉛の存在は当初「良い」とされていたが、アルキル鉛が猛毒であることが明らかになると、「無鉛ガソリン」が開発され、鉛を含まないことが「良い」と評価されるようになった。このように、時代の流れによって A グループに属する概念の評価も変わると考えられる。A3 の形成は、人間の認識が変化したことを反映している。

このように、「無」ではじまる二字漢語は、基本的に IN・OUT スキーマの OUT を採用していることが明らかになった。特徴は、この OUT プロセスにおいて、認知面から除外される内容の性質が注目されることである。この特徴によって、A2 と現代日本語における A3 を共通のパターンから区別し、「良くない」という評価を形成することに寄与している。

4.2 B グループと CENTER・PERIPHERY スキーマ

B グループは、意味的に「存在」を否定するのではなく、存在を強調するため、CONTAINER イメージ・スキーマにおいては内容ではなく境界線に注目している。そのため、B では IN・OUT ではなく、境界線の拡大・縮小を描く CENTER・PERIPHERY に関連していると考えら

れる。B の内部は B1 と B2 に分けられるが、両者は同じスキーマで形成されているわけではない。

- (4) a. B1 : 無限、無辺、無涯、無際、無極、無窮、無疆、無境、無垠、無端、無始、無終、無劫、無期、無数、無量、無算、無慮、無天、無底など
b. B2 : 無双、無類、無敵、無二、無対、無上

B1 は、「無限＝非常に広い」、「無期＝非常に長い」、「無数＝非常に多い」などの語が多いため、スケールで表すと量的価値が「多い」と考えられる。代表的な語として「無限」を挙げる。図 10 を見ると、B1 のグループでは「限界」が k であると想定されているが、「無」と結びつくことでその「限界」や「境界」が否定される。人間の認知は、最初に「限界・境界」をスケールの k_1 と想定し、次第に k_2 、 k_3 、 k_4 、...のように「無限」の方へ移動し、最終的に k_n に達すると考えられる。しかし、この k_n がどこにあるかについては、私たちは心的世界の中で想像するしかない。



図 10 スケールで見る B1

このように、「無限」のような B1 の語は、実世界において、人間がすべての物事に対して「限界、境界」が存在すると認識していることを反映している。ただし、その最終的な「限界、境界」がどこにあるかは不明である。一方、心的世界では、B1 は人間が想定できる「限界、境界」をすべて否定し、その結果特定の「限界、境界」が存在しなくなるため、「甚だしい」という意味が派生する。B1 は、図 11 のように CONTAINER イメージ・スキーマによって再表現できる。ここでは、旧範囲が LM となり、新しい範囲が TR として、旧範囲よりも広い。拡大プロセスが無限に繰り返されることで、B1 の認知面は中心（CENTER）から周辺（PERIPHERY）へと永遠に広がっていく。その結果、範囲が無限に拡大し、その範囲に含まれるオブジェクトも「無数」と表現できるようになる。このように、B1 の語は特殊な意味として「多い」を持つようになる。

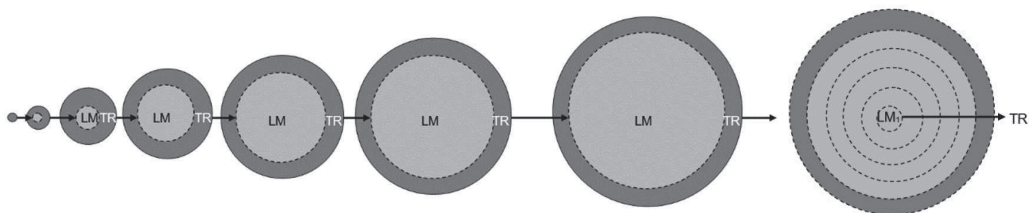


図 11 B1 のイメージ・スキーマ

一方で、「無比」、「無類」、「無双」といった語によって示されるように、B2の語基が直接「境界・限界」の意味を示さなくても、「比較する、対比する」行為に対しては必ず特定の範囲が求められる。そのため、B2は認知面でB1と同様にBOUND(境界線)を表す。B2の「無比」、「無類」、「無双」といった語は、程度評価として「甚だしい」を示しながらも、「唯一無二」や「優れている」といった積極的な意味を持っている。B2は「良い」という意味を含んでおり、B1との相違点を示唆している。B2の「無比」、「無類」、「無双」といった語基は量的概念を表すが、全体の意味において「対比・比較できないほど」の意味を持つため、単なる「甚だしい」を超えて「良い」となると考えられる。本質的に、「無二」や「無類」といった「無」ではじまる二字漢語は、他を否定し対象を限定することでその存在を際立たせる働きを持つ。その結果、量的価値としては「少ない、むしろ稀」である一方、質的価値は常に「良い」とされる。すなわち、B2では範囲の中にただ一つの優れたものが存在するため、「無」が語基の内容を否定している。このように、B2の意味形成プロセスはB1と同様にCENTER・PERIPHERYのスキーマを採用するが、B1が有限性を否定し外方向へ拡大するのに対し、B2は限定の方向に向かう。この場合、旧範囲が(LM)となり、新しい範囲(TR)はそれより狭く、LMの中に位置する。この縮小する循環が連続的に行われるため、B2の認知面が周辺(PERIPHERY)から中心(CENTER)へ移動することでイメージ・スキーマが機能している。最終的には、B2の範囲が無限小に縮小し、その範囲に含まれるオブジェクトも「唯一」と表現できるようになる。要するに、B2のCONTAINERイメージ・スキーマは図12のように図形化できる。

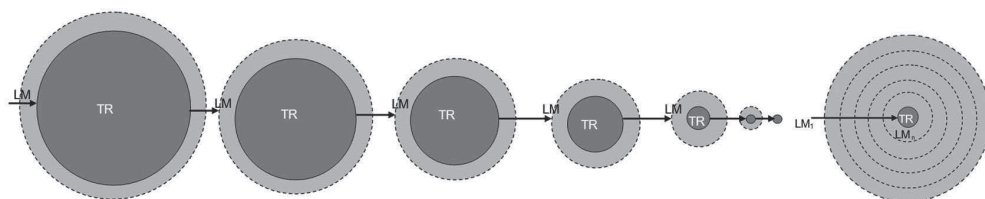


図12 B2のイメージ・スキーマ

B1とB2は同じスキーマを基にしているが、異なる方向で意味が形成されるため、それぞれの特長な意味に影響を与えている。B1は「0」から出発し、最終的な量的価値が「無限大」を表す。一方、B1の質的価値は「甚だしい」ととどまるが、文脈によっては「良くない」という意を表す傾向が既に確認されている。この点について、有光(2011:29)やチャン(2022:194)の指摘によれば、範囲が拡大すると質的価値が低下する。多くなればなるほど制御が難しくなり、不安定さが顕著になるため、「多芸は無芸」のように、「多いこと」が必ずしも良いわけではないのである。対照的に、B2は「無限大」(正確には不特定の数量)から減少していくため、最終的な量的価値は「1」になる。しかし、B2では数量が減少するほど質的価値が高くなる。例えば、「唯一無二」のように、B2の語は中心に位置し、人の目

を引きやすいため、B2 の語の価値は「良い」と評価されるようになっている。要するに、B1 が量的価値に注目するのに対し、B2 は質的価値に注目している点で異なる。

CENTER・PERIPHERY の理論のに基づき B1 と B2 の意味形成をまとめると、有界性 (*Boundedness*) と無界性 (*Unboundedness*) と深く関連している。Talmy (1988 : 178-180) と Jackendoff (1991 : 19-20) によると、対象が「有界性を持つ」とは、対象に明確な境界や限界があり、特定の範囲に制約されていることを意味する。逆に、「無界性を持つ」対象は境界がなく、無限に広がる可能性を持つ。人間は世界を「有界性」で認識する傾向があるが、「無界性」は「有界性」の否定として理解される。無界性は、物理的な空間や時間における「限界がない」ことを示すだけでなく、量的価値が「多い」ことにも関連している。このため、無界性の特徴は、B1 の「甚だしい」や「多い」で反映されている。質的価値に関して、無界性は無限の可能性や不確実性を伴うため、心理的には不安や恐怖を引き起こすことがあり、「甚だしい」となる一方で、「良い」質的価値を形成しにくいとされる。一方、有界性は有限な枠組みを提供し、現実世界を理解しやすくし、コントロールするための安定した基盤を提供する。このため、質的価値が特に顕著に表れるのは B2 の「良い」と感じられる部分であり、これは「有界性」の特徴であると考えられる。B2 では、範囲の中にただ一つの優れたものが存在することになり、「無-」が語基の内容を否定している。B1 が有限性を否定し外方向へ拡大するのに対し、B2 では限定の方向に向かう。例えば、「無二」や「無類」のように、他を否定し、対象を限定することでその存在を際立たせる働きをする。そのため、最終的に量的価値として「少ない、むしろ稀」を持ち、質的価値は常に「良い」とされる。

4.3 C グループと FULL・EMPTY スキーマ

C グループは心的世界に属する概念であり、人間が認知面にある内容を主観的に把握している。内容評価から見ると、以下のように C1 と C2 を区別する。

- (5) a. C1 : 無礼、無頼、無学、無知、無理、無味、無名、無能、無用、無心など
- b. C2 : 無難、無事、無垢、無我、無苦、無念、無欲、無想、無迷、無執など

C の特徴は、量的価値「少ない」を示すものであるが、「無」が「価値性の否定」を示した結果、本質的に「足りない」という意を表すことが明らかになっている。このように、C グループは FULL・EMPTY のスキーマを採用している。C のスキーマの特徴は三つある。一つ目は、内容の性質が A や B とは異なり、液体であり、完全にはなくならないものである。二つ目は、容器がオープンな空間ではなく、固定的で密閉したものである。三つ目は、C の移動が容器の上から底へ下がる→で示すように、一方方向である。この際、認知は内容 (TR) が水準となる FULL の状態 (LM) と比べて低い状態を反映する。C の認知面は、容器の上面を基準としている。その基準から液体の量が少しでも離れると、C の「無」ではじまる二字漢語が生成される。この「足りない」レベルは広く「NOT FULL (非満)」に該当

し、「無」ではじまる二字漢語は「FULL（満）」の状態ではないが、完全に「EMPTY（空）」でもないことを示している。

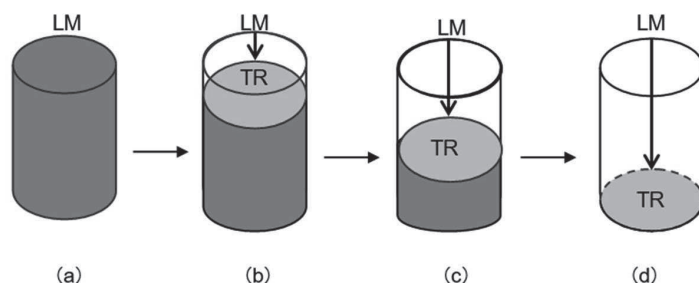


図13 FULL から EMPTY への状態変化

図13では、(a)がFULL様態を示し、Cの意味形成におけるLM（基準）となる。一方で、(b)、(c)、および(d)はNOT FULL（満ちていない）状況を示し、いわゆる「足りない」状態を表現している。これらはCの「少ない」という意味を形成する要素であり、(b)～(d)の内容（TR）は、満杯（LM）と比較して低い水準であるが、足りなさの深刻度を示す。しかし、Cグループは(d)の状態においても、完全に「ない」という状況には至らないと考えられる。これは、Cの内容が「ある」ことを前提としており、「欠けている」や「足りない」に注目するため、特に「少ない」という特殊な意味が形成されるからである。

質的価値については、C1とC2のスキーマを個別に検討する必要がある。C1の内容は「良い」（「+」の記号で表示）とされ、水準が下がると「良くない」と理解される。一方、C2の内容は「悪い」（「-」の記号で表示）であり、悪い基準から下がると「悪くない」と言えるが、完全に「良い」とは言えない。これは、Cの内容が完全になくならないため、C2の「悪い」と見なされる内容がまだ容器内に存在し、液体がいつか頂点に至るという恐れがあるからである。以下の図14と図15に、C1とC2の質的価値の概念化を示す。

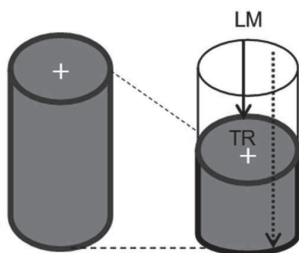


図14 C1のイメージ・スキーマ

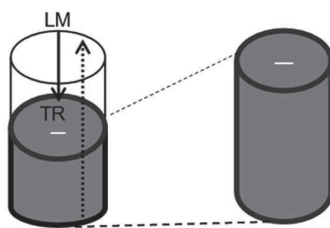


図15 C2のイメージ・スキーマ

C1とC2の特殊な意味は、量的価値（実線の矢印で表示）と質的価値（点線の矢印で表示）の移動性が同じかどうかによって異なる。C1のCONTAINERイメージ・スキーマでは、量的価値と質的価値の移動性が同じ方向、つまり下向きに従う。これは、量的価値が少なけ

れば少ないほど、質的価値が悪化することを意味する。C1 の内容が減少するにつれて、その質的評価も低下する。一方で、C2 の CONTAINER イメージ・スキーマでは、量的価値の移動性と質的価値の移動性が逆である。量的価値が減少する際、質的評価は逆に良くなる。これは、C2 においては、量が少ないことがポジティブな評価に繋がる場合があるためだ。しかし、C の内容は容器内で絶対的に「ない」とはならないため、C1 の質的価値は「悪い」ではなく「良くない」ととどまる。また、C2 も「良い」ではなく「悪くない」と評価される。これにより、両者の質的価値の評価は限定されているが、それぞれ異なる意味合いを持つことが明らかになる。

この問題の本質は、人間が悲観的な見方で C グループを評価している点にある。C1 の場合、人間は FULL・EMPTY スキーマを心的世界の概念に照らして、EMPTY（空いている）に注目する傾向がある。図 14 に示されるように、C1（右の容器）は、FULL（左の容器）と比較して「欠如」状態を表すため、「良くない」と評価される。しかし、この認知は C2 の内容が「良くない」とされる場合に適用されない。C2 においても悪い状態が「欠如」しているが、それが必ずしも「良い」と評価されるわけではない。C グループの CONTAINER イメージ・スキーマの内容は、A や B とは異なり、完全に「ない」状態ではなく、「あるが、足りない」状態を示す。したがって、FULL・EMPTY スキーマでは、容器の空いている部分よりも液体で占められている部分に焦点が当たる。「不在」や「欠如」よりも「存在」の方が認知しやすいためである。図 15 の C2（左の容器）は、内容が「足りない」ため、性質が「悪い」状態にはならない。C2 は「悪い」基準に対してその性質が低いため「悪くない」と評価されるが、元々その内容が「悪い」ため、潜在的な危険性が伴う。このため、C2 の質的価値は「良い」とは評価されない。C1 と C2 の質的価値の形成には明確な相違点がある。C1 は期待や想定と現実の対比を反映し、落胆の気持ちを表す。一方で C2 は、厭世的な見方を持ち、ネガティブな感情を表す。このように、C の「無」ではじまる二字漢語は、本質的に「価値性の否定」に影響し、語義にマイナス的なイメージを付加する点が共通している。

このように、C グループの語は量的価値と質的価値の観点から評価されるが、心的世界の概念や認知の仕組みが大きな影響を与えることが明らかである。さらに、C2 の評価を見ると、人間が状態の変化にも着目していることがわかる。「ない」状態は一時的なものであり、元の状況に戻る可能性があるため、C2 は潜在的に「良くない」を含み、意味が「良い」にならない。

この点は、「無料」、「無痛」、「無鉛」といった語の A3 がなぜ存在しないのかという課題にも関連している。仮に A3 で「良くない」オブジェクト（液体ではない）が除外されると、認知面ではその対象が一時的な「不在」の状態を示す。普通の状況と比較すると、その「良くない」内容が常に「ある」と感じられる。例えば、「子どもの医療費無料化」は、過去にかかった医療費を前提としてその負担を撤廃する措置であるが、子どもが成人になると、その支援は終了する。「無痛分娩」は、分娩時の痛みを取り除くが、麻酔の効果が切れれば痛

みを再び感じることになる。「無鉛ガソリン」は、かつてガソリンに含まれていた鉛を指し、ガソリン自体は人間にとって良くないものだと連想される。このように、A3 という語は評価が「良い」ではなく中性的なものとなる。その結果、A3 は同じ中性的な性質を持つ A1 と合併し、特定の意味合いを持たないと扱われることになる。

5. 「無」ではじまる二字漢語の量的価値と質的価値、そしてその関係性

「無」ではじまる二字漢語における特殊な意味の形成メカニズムを第4節で検討した結果、本研究は次のように特殊な意味をレベル別に区分できる。

量的価値について厳密に言うとは、どのグループでも存在する。「無」ではじまる二字漢語の量的価値には、典型的な「0」、発生した「1」、および抽象的な「少ない」と「多い」がある。その中で、実数で表現される「0」と「1」は実世界の範囲で成立している。典型的な量的価値、つまり「0」は、基本的に人間が実世界を客観的に把握する際に機能する。「1」は、「無敵」、「無双」、「無比」などの語基が自分以外の他人や同類を「無」で除外する場合に確認される。一方で、特殊な量的価値である「少ない」と「多い」は、人間が主観的に把握する内容にあり、特に心的世界が機能している範囲で確認される。その中で、「少ない」は「無」それ自体で表せるし、「0」に近づいても、「0」との間にはまだ幅がある。しかし、「多い」という量的価値は「無」それ自体の価値ではなく、「無」ではじまる二字漢語の意味全体から派生した「甚だしい」は、一部の語で固定化した結果であると考えられる。さらに、その意味は語基が「数、量」の概念を示す場合にのみ確認され、派生由来がさらに明らかになっている。このように、「無」ではじまる二字漢語の特殊な意味には、「多い」が最も特殊化した量的価値を表すものと説明することができた。

質的価値については、量的価値と比べて同じく5つの価値があるが、やや複雑な事情を示している。それは、程度評価の「甚だしい」と「良し悪し」を決める「良くない」「良い」「悪くない」「悪い」である。「無」それ自体の典型的な質的価値は「良くない」である。「無」が否定的な接頭辞として、基本的な機能「存在性」を否定すると同時に、「価値性」の否定も兼ねているため、「良くない」を意味していると言える。「無」ではじまる二字漢語の中で、この意味が多く確認されることは珍しくない。特に、「良くない」の質的価値を表現するのは、後ろの語基が人間にとって「望ましい」存在の場合である。一方で、他の質的価値は、語基の性質と量的な価値と関連している。「良くない」と反対の意味は「良い」であり、この「良い」は派生した価値であり、B2のみで確認されている。このように、「無」ではじまる二字漢語の特殊な意味の中では、「良い」が最も特殊化した量的価値を表すものと言える。「悪くない」は主観的に把握される心的世界のマイナス的な概念で確認される。「悪くない」は語基の性質と反対に、語義全体で「良い」と同定されるため、気づきにくい。「悪い」という意味は「無」を「ブ」で読まれる語で確認される、あるいは文脈で確認される。最後に、「甚だしい」は程度評価で「水準より大幅に超えたさま」を示しているが、この意味を

持つ語は文の次元で「良い」か「良くない」の意味が発生することがありうる。

総じて、量的価値の体系は理解しやすく、分析と理論化が明確である。量的価値から質的価値への発展にはつながりがあるが、質的価値の形成経路は複雑で、語基の内容や量的価値から強く影響される。「無」ではじまる二字漢語で明らかにした特殊な意味を次のように3つのレベルで整理することができる。レベルⅠは「無」が漢語構成要素として、それ自体があらわす特殊な意味である。それは、「少ない」と「良くない」である。レベルⅡは、「無」ではじまる二字漢語全体で確認される特殊な意味である。「多い」と「甚だしい」が代表として、二字漢語の一部で確認される。レベルⅢは、「無」ではじまる二字漢語の意味を含むが、文脈に強く支配される。そのため、文脈に置かれないと、それらは明らかになっていない。それは、ほとんど質的価値、特に評価に関係する「悪くない」、「悪い」、「良い」である。

6. まとめ

本稿では、「無」ではじまる二字漢語の特殊な意味について、CONTAINER イメージ・スキーマによる形成プロセスを明確にすることができた。

一点目は、「無」ではじまる語のA、B、C各グループで確認される特殊な意味の本質とその関係性を明らかにしたことである。Aグループでは、量的価値がないものの、その「不在」が良いかどうかによって、A1とA2の質的価値が異なる。常に「良くない」を示すA2と違って、A1では「良い」として評価される語もある。Bグループでは特殊な意味が多く確認されるが、B1とB2における認知スキーマが逆方向で行われるため、特殊な意味が異なっている。B1は程度評価「甚だしい」から「多い」へと発生する一方、B2は量的価値「少ない、むしろ稀」から質的価値「良い」へ、さらに「甚だしい」へと発展する。その結果、Bで確認される「甚だしい」は、B1では基本的な意味であり、B2では文脈に応じて確認され、発生した結果である。Cの特殊な意味については、C2の「悪くない」がC1と同じく量的価値「少ない（足りない）」があるが、語基の本質と注目する点が異なるため、質的価値が分かれる。このように、本研究は、「無」ではじまる語の特殊な意味について、チャン（2022、2023a、2023b）の意味論・形態論の成果を合理的に整理し、語義全体への貢献度に基づいて、特殊な意味をレベル別で整理することができた。

二点目は、「無」ではじまる二字漢語の特殊な意味についての追究において、AでIN・OUTスキーマ、BでCENTER・PERIPHERYスキーマ、CでFULL・EMPTYスキーマで説明したことを通じて、CONTAINER イメージ・スキーマが「無」ではじまる語、特に特殊な意味の形成メカニズムを解説することに重要性を示唆することができた。特に、これまでうまく説明できなかったBグループの特殊な意味は、CENTER・PERIPHERYスキーマを用いたことで、「無い」から「多い」や「良い」といった非常に独特な意味が形成されるプロセスを初めて説明することができた。このように、CONTAINER イメージ・スキーマに関する議論は通常、IN・OUTスキーマとFULL・EMPTYスキーマが多く取り上げられるが、本研究を

通じて、内容だけでなく、人間の認知においても容器の範囲が拡張や縮小することができることが明らかになった。CENTER・PERIPHERY スキーマは認知の柔軟性を示し、範囲が常に Bounded ではなく、Unbounded でもあり、境界線が常に Landmark だけでなく Trajectory にもなり得ることを示している。本研究は、「無」ではじまる二字漢語の特殊な意味の形成において、CENTER・PERIPHERY スキーマに基づく容器の範囲の流動性を再び喚起した。

今後の課題としては、CONTAINER イメージ・スキーマを「無」ではじまる三字漢語、混種語に照らし、二字漢語で確認される特殊な意味との共通点と相違点を指摘することである。また、日本語に限らず、漢字文化圏全体における「無」ではじまる語の特殊な意味を説明することも重要である。

参考文献

- 有光奈美 (2011) 『日・英語の対比表現と否定のメカニズム：認知言語学と語用論の接点』 開拓社。
- 有光奈美 (2013) 『『無』と『空』の関連表現と広告表現における“fill the void”の位置付け：John Cage『4分33秒』の世界観との接点』『経営論集』(81)、pp.161-177。
- 王淑琴 (2006) 「日本語における否定接頭辞『不-』『無-』『非-』の語形成：語基に課される意味的な制約」『東吳外語學報』(23)、pp.125-147。
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房。
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』くろしお出版。
- チャン クォック ヒエップ (2022) 「日本語における『無』の意味についての研究：『無』ではじまる二字漢語を中心に」『日本語・日本文化研究』(32)、pp.182-196。
- チャン クォック ヒエップ (2023a) 「日本語における『無』ではじまる二字漢語の意味についての研究：『無』と結合する語基の意味を中心に」『ハノイ大学日本語学部第4回国際シンポジウム紀要：日本語教育と日本研究～世界の潮流とベトナムの実践』、pp.200-218。
- チャン クォック ヒエップ (2023b) 「日本語における『無』の意味についての再考：『無』ではじまる二字漢語とその反義関係に基づいて」『日本語・日本文化研究』(33)、pp.84-98。
- Jackendoff, R. (1991) *Parts and boundaries*. Cognition, 41(1-3), pp.9-45.
- Johnson, Mark. (1987) *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar; Vol.2*, Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press.
- Raykowski, Wes (2018) *Layers and Levels: What a column of water tells us about Human cognition*, Cognitive Semantics (4), pp.104-134.
- Raykowski, Wes (2022) *Sensory Schema: From Sensory Contrasts to Antonyms*, Cognitive Semantics (8), pp.240-268.
- Talmy, Leonard (1988) *The Relation of Grammar to Cognition*, Topics in Cognitive Linguistics, ed. by Brygida Rudzka-Ostyn, pp.165-205, John Benjamins, Amsterdam.